住居した地であると。又一説に、昔弓師近江なる者が此の地に居住したための稱であるともいふ。今は上・下近江町に分かれてゐる。

アフミリヨウ　近江領　近江に於ける加賀藩領は、前田利家が上洛の途次宿泊の利便に供する爲、豐臣秀吉から高島郡今津西濱九百二拾八石四升、同弘川之内九百三拾六石五斗三升の地を與へられたるに初る。この朱印狀の原本は年附の數字が磨滅して居たから種々の議論があるが、文祿四年三月六日とするのが正しい。この後慶長三年四月二十日利家の老を告げるに及び、秀吉はこの二邑を利家の室芳春院に與へて化粧料に當てしめ、芳春院の元和三年に歿するやその所屬甚だ曖昧になつたが、同六年將軍秀忠は改めて之を前田利常に與へた。次いで寛文八年加賀能美郡の尾添・荒谷を幕府に收め、その代償として近江海津の内中村町の百七十一石九斗八升を與へられたから、爾後加賀藩の近江に有する所、凡べて貳千四百三拾貳石貳斗六升貳合となつた。

アブヤ　安部屋　羽咋郡堀松庄に屬する部落。能登名跡志に、『安部屋村は舟の懸間あり。洲崎に辨天の社など有、風景なり。此村に津兵衞といふ者あり。先祖は尾州の住人服部土佐守とて、太閤秀吉公の時一萬石給はりし御朱印等持傳へり。其外小酒屋抔とて持船あり。町端にカン〳〵石とて、鏡の如くなる石あり。』と見える。

アブヤコウ　安部屋港　羽咋郡に在る。海水灣入して港を爲し、三味線島が北方を擁して、外ノ澗・中ノ澗・大澗・榎澗に分かれる。古來有數の港として廣く名を知られ、正保圖にも記されて居るが、深さ八・九米に過ぎず、五六百石積以上の船は入るを得ぬ。

アブヤヌノ　安部屋布　羽咋郡安部屋に產する麻布を、安部屋布とも安部屋晒とも志賀晒ともいうた。昔は磯崎の岩の上に布を並べ、波濤に打たせて晒したから、しほ晒ともいつたといふ。享保の頃安部屋の人金平が、桑を原料とする布を製し、同地上野の弘法水により漂白して發賣するに及び、その名漸く著れ、金平の子五平が船便を以て出羽最上から苧を輸入して製織してから更に產額を增し、產地は附近志賀郷一般に亙り、その取引を高濱で行うて廣く他に搬出することになつた。

アブラガイケ　油ヶ池　白山御前岳の一角御寶藏を北に下つた所にある。水色混濁して油の如きが故に名づける。凡そ山中の水皆清潔であるが、唯これのみ臭穢にして飲むに堪へぬ。蓋し火口原湖で、コニーデ式火山の開析された狀態が能く見られる。

アブラキヤマ　油木山　金澤山上町の裏地を總べて油木山といつたが、今は高道新町と稱する。この地卯辰山續きの山麓を平均して寺地とした所で、古へは油木を植ゑてあつたといはれる。油木はその果實から桐油を製する油桐のことである。

アブラグルマ　油車　金澤の町名。初め河合藤左衞門宣久から三代の孫に亦河合藤左衞門といふ者があつて、石川郡坪野に居り、法躰して才覺と號したが、其の子は町人となつて坪野屋源兵衞と稱し、松任に移つて油商を始めた。其の孫藤左衞門の子與助の時に至り、正保中金澤に出て、岩谷牛右衞門揚地（油車牛右衞門橋附近）に居住し、初めて油車を設けて菜種油を製したが、八代油屋源兵衞に至つて竪町に轉宅した。後その油車を設けた地の附近を油車と稱して町名となつた。

アブラグルマオカチマチ　油車御歩町　金澤の舊町名。油車附近に在つて、御歩の邸地であつた。一に水車御歩町ともいひ、水溜御歩町及び觀音御歩町と區別した。今は油車に屬する。

アブラザカ　油坂　白山別山から御前岳に向かふ途にある急峻の坂路で、標高二一三〇米から一八五〇米に至るまで殆ど平地を見ず、柳谷川の支流赤谷川に至つて終る。

アブラザカヤサブロエモン　油酒屋三郎右衞門　家記に依れば、慶長年中三郎右衞門は石川郡矢作村から金澤堂形邊に出で、矢矧の業を職としたが、元和に至つて竪町へ移住し、燈油と酒を鬻ぎ、遂に油酒屋を家號とした。後寶永元年業を酒造のみとしたため屋號を酒屋とし、二代三郎右衞門の子太兵衞は片町に別居した。是は酒屋宗左衞門家の初である。正德元年太兵衞隱居して更に別家を建てた。是を片町の酒屋太四郎家とする。夫より本家三郎右衞門・別家宗左衞門・太四郎の三家となり、その別家は酒宗・酒太と號して呉服商を營んだが、本家の三郎右衞門は酒造を廢して追々衰微し、嘉永五年遂に家屋を賣却した。宗左衞門・太四郎兩家も廢藩置縣の際呉服店を廢し、家道また衰へるに至つた。

アブラセキ　油堰　金澤覺源寺舊寺地の尻地なる川除に水戸口を設けて、犀川から用水を取入れ、その水戸口を古來油堰と呼んだ。此の用水は玄蕃川と稱し、下流百姓町に出で、鱗町で倉月用水に合して油車に出た。油車は正保中油屋與助が初めて水車を設けて燈油を製した所である。當時倉月用水のみでは水勢弱くして水車を動かすに足らなかつたから、別にこの水戸口をつくつたので、油車の水を引く故に油堰と名づけたものである。

アブラヤコキン　油屋小金　一に古今に作る。京都の賈人。天正十二年佐々成政が前田利家を欺く爲、密かに村井長頼に利家の息又若（後の利政）を己の女の贅壻とせんことを申送つた時、成政の使者として遣はされたのがこの小金であつたといふ。

アブラヤヨスケ　油屋與助　→アブラグルマ　油車。

アベクロエモン　阿部九郎右衞門　御馬廻組に屬し、祿二百石を受けた。寛文四年十月十六日田邊彌五作（百五十石）と喧嘩し、同道の浪人天田伊左衞門と共に死して家斷絶した。彌五作も次いで切腹を命ぜられ、この以後かくの如き爭鬪を制止する爲喧嘩追縣者役を置くことになつた。

アベジンエモン　阿部甚右衞門　元和二年前田利常に仕へ、祿遂に二千石に至り、足輕頭に任じ、慶安二年歿した。

アベツトウ　阿別當（アベツト）　鳳至郡寺山に屬する小字。能登誌に、『寺山村の散村に阿別當といふ所に、黑嶺の城主阿部判官綱連の塚あり。往來緣にて其所を五輪と呼べり。則此村に判官の子孫有て、阿部殿と呼びしを、誤て阿別當といへり。』とある。→アベヨシムネ　阿部義宗。

アベヨシムネ　阿部義宗　鳳至郡黑峰の城主で阿部判官といひ、越後の上杉軍の爲に攻